

『心のきよい者』(マタイ5:8)

聖書箇所 マタイ5:8

5:8 心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るからです。

「心(v8)」は「カルディア」という言葉が使われています。考え、言葉、行動の「源」とのニュアンスがあります。また「きよい」は「混ざりものがない」「一心に」「単純に」との意味です。「心のきよい者(v8)」と聞くと道徳的にきよい者を思います。そういう意味が全くないわけではないのですが、それが中心的な意味ではありません。「心が神に一心に向いている者」です。自分の心の中を見て罪があるかないかということよりも、自分の心がどこに向いているかが問われています。世の中の色々なものを追いかけているのか、それとも神を求めているのかが問われています。この世のものが不要ないというわけではありません。富は必要なものです。でも愛するものではありません。名誉や評価は悪いものではありません。でも求めるものではなく結果として伴ってくるものです。

心を神に一心に向けていくのは、神が私たちに一心であられるからです。旧約時代、神はイスラエルの民に十戒を与えられた時、まず戒めを与えられたではありませんでした。「わたしは、あなたがたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、主である(出エジプト記20:2)」「わたしは、ねたみの神(出エジプト記20:5)」とご自身の愛を告げられました。新約時代、私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪の宥めのために御子イエス・キリストを与えてくださいました。そして神は今ご自分のものとされた私たちを心配し、益を願い、益をなして下さっておられます。だからその神に私たちの心を一心に向けていくのです。どんな働きをなしていても、人中にいても、どのような状況の中でも私たちの心を神に向けていくのです。

「その人たちは神を見るからです(v8)」心を神に向けていくときに神との交わりは深められていきます。神との交わりは人格的關係ですから、固

定されているものではなく深められていくものです。一方、イエス・キリストを信じ罪赦され神との関係に入れられても、心を神に向けることなく、神以外のものに心を向け、それを第一とした歩みを続けていくならばどうでしょうか。神との関係は変わらないのでしょうか。神が義と認めてくださった救いの約束は変わりません。でも、神との交わりは薄れ、自分中心になり、罪に鈍感になり、「心(v8)」は考えや言動の源ですが、考えることや言葉や行いが神の御心から逸れていきます。いただいた救いを無駄にする歩みをなしてしまいます。知らぬの内にです。サタンは、あらゆる方法をもって私たちを神から離れさせようと働きかけています。イスカリオテのユダは弟子たちの会計役でしたが、たまたま誘惑に流され主イエスを売ったのではなく、普段からお金を盗んでおり、それが主イエスを銀貨30枚で売る恐ろしい罪をなすことになっていきました。主イエスに名を呼ばれ、主イエスに愛され、主イエスとともに歩んでいましたが、心が主から離れていたのです。罪は発展していきます。罪はそのままではありません。熟していきます。浸食していきます。でも、罪の力が失われる方法があります。サタンが退いていく方法があります。神に近づくことです。神が近づいてくださるのです。「ですから、神に従い、悪魔に対抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。…二心の者たち、心を清めなさい。(ヤコブ4:7~8)」それのみです。ともにおられる神に心を向けていくときに神は近づいてくださいます。神との交わりが深められていきます。そして、神との交わりは喜びをもたらしていきます。務めをなしていく力をもたらしていきます。そして、やがて天の御国において神にまみえる真の喜びと祝福に与ることができるのです。「私の心を一つにしてください。御名を恐れるように(詩篇86:11)」